

## 明泉寺由緒

この寺は詳しくは天照山明泉寺、通称を長田の大日という。宗派は臨濟宗で京都東山南禅寺の末寺で寺格は二等地である。所は大昔真野の庄の一部であった摂津の国八郡林田村之内長田村字大日または明泉寺であって、その後、兵庫県神戸市林田区长田明泉寺町となり、林田区が廃止になって昭和18年3月1日より長田区に改まり、現在では神戸市長田区明泉寺町二丁目20番地。2番屋敷となっている。また、宮川町九丁目より丸山二丁目までを大日通りと称するようになった。この寺の真実の名称は明泉寺であるが、通称の大日寺の方が有名で、よく人にも知られている。県庁、市役所および本山方面の書類等は明泉寺でなくては受け付けられないが、普通は皆、大日寺、山の大日さん、長田の大日さん、または牛の寺でないと通用しませんでした。元は家も八軒くらいであったために、長田の奥の大日といい、お寺は吉川英治氏の源平および湊川の戦いにはいずれも大日堂と書かれている。寿永の戦いに焼けるまでは大山寺にも比すべき寺であったが、焼けたのち、とりあえず仮堂を立てて本尊さんをお祀りした時から大日堂と称するようになったものならん。大日堂と書かれているように、昔は大日堂というていたようである。

寺号をそのまま明泉寺町一丁目、二丁目、三丁目と改称されたのは、まだつい先ごろの昭和18年以後のことである。

この寺は昭和36年の今を去る、およそ706、70年の昔は、現在の地より約1里余り奥、現在の萩の町の上に平らな景勝の地あり、ここを明泉寺跡と伝え、字名を中一里山（東山ともいう）といった。

なんの因縁で、このようなところにお寺が建ちしやと尋ねるに、話はおよそ昭和36年より、1204年の昔、神武天皇より6代聖武天皇の時代に、行基という徳の高い不言実行の坊さんがおられ、悩み多き人の世に特に哀れに思うは、食べ物がなくて飢え死にや行き倒れ、野垂れ死にする世のありさまを見るにつけ、嗚呼、かわいそうに気の毒なことよ、なんとか助けるすべはあるまいか。助けたい、救うてやりたいとの篤き思いやりと、念願からまず五穀を豊かならしめねばならんと、諸国の荒地を開墾整地すなわち土木事業をして、田んぼや畑を作り、五穀を豊穰ならしめることに専念努力された。かくて慈悲の手と思いは伸びて、真野の庄、すなわち現在の東尻池及び駒ヶ林一体の地を開墾され、これらの田畑を養い、五穀を豊穰ならしめるには水がなくてはと、大きな溜池を作られたのが蓮の池である。

明治天皇大演習の際は長田より明泉寺一帯で大演習があつて、我が大日寺へも兵隊が大勢こられ、最後に埋め立てられた蓮池のあとで大分列式が挙行されたときは、各学校の生徒は十重二十重の輪をなし。市民は後ろの池田山より眺め、神戸では初めの終わりとなりましたが、大変な人垣の中央で歩兵、野砲、軍馬と砂煙を立てながらの大分列式しても、なお後ろに空き地があった。その後、昭和7年4月3日に市民大運動

場が、昭和元年には蓮池小学校が出来たが、なお東側に空き地が残っているのを見てもいかに大きな池であったかということがわかる。現在史跡蓮の池跡という石柱が建っているが、嘘のようなほんとうに大きな池であったことが思い知られる。西代と池田の両村に属する蓮の池は17,400坪の大池であったと聞く。

およそ1204年も、昔人でも少なき時代によくもこのような大工事ができたものよと、ただただ驚くとともに、古人の労苦に対し感謝の念を持たねばならんと思う。この池を埋める工事を請け負った人は、当時、長田神社の東におられた開出鹿造氏で、この大工事に使用した和牛は売られ、一頭150円ほどと記憶しているが、池と大日如来とは深い因縁があることを知られたものか、全額奉納くだされ、私は大いに感激した。なお米寿の祝いには紅白のお鏡とお宝1000円也を大日如来へ、自ら持参してお供え下されたが、昭和34年に89歳で大往生された。今は霊界で行基様にお会いになり、移り変わる世のありさまは是非もなしと、娑婆のニュースを聞く人、語る人。おゝ人の霊安かれと常に念じておりますが、不徳の身の念波の力の至らないことを申し訳なく思っている。

それでも昭和元年に蓮池小学校と共に、向かって右東の角に申し訳のような池をつくり、昔のなごりを止めていたところ、この度、またまた都市計画事業による道路拡張工事の中心に当たったために、姿を消していたが、心ある人々の願いが叶い、再び学校庭園の中央に移転、復元して昭和36年6月22日に工事完成した。

これでささやかながらも奈良朝時代に行基菩薩が農民の悩みを解消された労苦に報いることにもなると嬉しく思う。さて、行基様は造られた蓮の池の水源を苧藻川に求め、水路を池田前より長田の馬場先西側にそうて北に上り、光堂寺の横をさらに上り、長田で立志伝中の人、道端佐市氏宅の右横を上り、長田交番所に至る溝の一部を今もなお見ることが出来る。現在の交番所のところに、樋上と称するすなわち、水門または水の取り入れ口があった上に、現在交番所が立っているのであるが、昔はこの樋に沿うて西隣に、大きな家があり、樋上吉太郎という旧家で、今も立派に残っている。すなわち樋の上の家という家号がそのまま苗字になったのではあるまいか。

とにかく取り入れ口の様子はすっかりかわり、昔の面影はみられない。昔は川幅が広く、今の八雲橋は倍もある長くて大きな橋であった。八雲という名称はご御祭神事代主の命は出雲の出身なれば、故郷を遠く離れた命の御心を慰めるために、心して命名されたものならん。水の必要なき時は橋下に斜めに土嚢を積んで下への流れを止めて蓮の池へと苧藻川の水を迎え入れたものである。苧藻川はお宮の区間を宮川と称し、昔は名に相応しく清い水が流れ、上の明泉寺橋で二条となり。左を西之川または蓑谷川といい、右本流は再び苧藻川となって上り、天神山の下で信者が身を浄める行場となり、この辺に限り今もなお昔の面影を残し、溪谷美が見られる。やがて現在の滝見橋をへて、馬が滝となり、なおも上り、現在の神戸電鉄丸山駅の下より大日温泉を過ぎ、お池の尻、現在の大日大橋の西の丘、鶯丘に至る。左上にそびえる高峰を俗に東

山という。この辺りに寺を建て、中央大日如来を安置して天照山明泉寺と命名されたのが現在の明泉寺、通称大日寺の始まりである。すなわち、この辺り一帯の雨水および蓬の雫萩のしたたりを集めて、荇藻川に細く長く流れて、蓮の池を常に満たし、田畑を養い、五穀を豊穰ならしめ給えと念願されたもので、すなわち、太陽と大地、お照りと水に恵まれてこそ五穀は実る。それには諸仏の王たる中央大日如来の加護とお慈悲によると、上下ともに固く信じて疑わなかったのである。

随分と大きく立派な寺であったことと思う。それはいずれの道しるべにも、「従是大日寺大山寺道」とあるのを見てもそのように思うのである。すなわち、現在の大山寺と大日寺とでは比べ物にならないのに、道標には同じように肩を並べているのを見て、何も知らない他国の人が参詣されなば、お相撲の横綱と禪担ぎを見るようになって、かりされることと思うが、大山寺は幸いにして火災に遭わず、広壮なる伽藍は、創建当時そのまま、兵庫県下随一の大伽藍なるに比し、明泉寺の方は運悪く、源平の戦いには越中の前司平の盛俊の陣所となっていたために、義経一向が高雄の峰より道を転じて一の谷に向かう途中で焼き払われ、平家は敗戦の悲しさ。福原の都は焼け野が原と化し、明泉寺の如きもその分に漏れず、でも幸いに本尊大日如来は肩や背に火傷ぐらいで、無事なりしを、広泉長介なるものが、嗚呼もつたいないと背に負うて、現在の地に下り、ささやかな大日堂を建て、安置されて、今日に至るかのように聞いており。

明泉寺を本陣と定めておいて、長田北部一帯を守っていた大将盛俊は力への人力もある平家では能登の守教経に次ぐ剛の者なりしが、義経の軍が鶴越を来るとは夢にも気づかず、長田方面にのみ気を取られ、名倉の附近を見守る頃に、義経の方では道すがらの明泉寺を焼き払って一の谷の裏に向かいつつあることを知らず、待てど暮らせど敵は見えぬ、あっぱれ豪傑も相手がいなくては戦いにならず、退屈まぎれに田の畦に腰を下ろし、旧〱月の〱日の末になれば寒くはなし、その頃はまだ日本にタバコは無いが、例えばタバコでも一服吸うような気分で休んでいたものと思う。そこへ源氏方の猪俣小平六なるものが馴れ馴れしく近づき、源氏の平家のと互いに争い、勝も負けも同じ日本人なるに、つまらんことではありませんか、などと合戦中であることも忘れたかのように、のどかな気分で話しながら、隙を見ているとも心付かず、また取るに足らぬ源氏うじ虫ぐらいに思い、気を許していたのが失敗の元。油断大敵、突然、力任せに下の泥田へ真っ逆さまに突き落とされ、折り悪しく泥田に首を突っ込んだからたまらない、平家で名高い剛の者も、猪俣如きものために首を上げられ、英雄の末路の哀れ憐さを留めしところは、元名倉郵便局の東に塚あり（名倉町2丁目2-9）、俗に盛俊塚とて悲劇のありしところ。元は土饅頭の上が細い道であったが、この辺りの耕地整理記念として、時の兵庫県名知事服部一三氏の筆で大正10年4月28日に建立されたものである。源平の戦いは平家、すなわち安徳天皇の、寿永3年旧〱月〱日、源氏が担いだ後鳥羽天皇の方では天曆元年旧〱月〱日の出来事であった。

平家の運命はあまりにも悲惨な末路となり、福原の都も一日にして再び立つ能わざるに至る。

その後、明泉寺は本尊とともに現在の地に移りて、およそ16、170年にもなるのではあるまいか。勝つも負けるも、夢の如くに時と共に去り、霧の如くに消えたるも、平和と国土安全と五穀豊穰を祈願する大衆信仰の拠り所は、千数百年後の現在に至るも、なお願うものにはほどほどの利益をお授けくださる大日様のご慈悲のありがたさを念得なし、心に満足を得るもの、今も昔と変わりがない。

「人に仏性あり修せずんば出でず、石に火あり打たずんば出でず。」ご利益は信仰と努力によつて精神、物質ともに恵まれるものと、堅く信じたきものである。

私が明泉寺、すなわち長田の大日さんへ小僧に来たのは明治27、8年、日清戦争の頃であったかと記憶している。その頃、兵庫の八王子の前に日本大勝利の油絵などいろいろ売る店があつて、子供のこゝとて欲しくてたまらず買って来ては楽しんでいた頃で、今は思い出もおぼろげとなるも、その時分、大日寺には世にも珍しい楓の大樹が二本あつて、一本は現在の手洗い鉢の向こうにあり、石段の上へ傘のように枝を張り、金茶色に紅葉して、門景の良いこと、美しいことはたとえようもなく、今一本は現在の牛の銅象の右向こうにあつて、これはまた真紅に照り、その綺麗なことは燃えるようでした。下の将棋に腰掛けています。観楓客の顔まで赤く照り返し、ほんとに綺

麗であった。二本とも一行寺楓で、葉の大きなことは、赤ん坊の掌ほどもあって、幹の太さは子供の私では三抱えくらいあった。枝は境内の半分を覆い、いかに大樹であったかは、現在保存している写真によって真景であることを知ることができる。この写真は、今の神戸美術館を創設された故池永猛氏の養父池永通氏が、いまだ写真機は大きな機材を立てたりしている頃に、カメラを手のひらに乗せて境外より撮影されたのに私はびっくりした。昨今ならば超高級品であったろう。先頃、徳川夢声氏が可愛い小箱を手のひらに乗せ、これはゲルマニウムで発声するトランジスタラジオであると、初めて聞いて驚かれたことを思えば、田舎者の私が驚いたのも当然のことである。

後日いただいたのがこの写真で、不思議なもんやなあと、子供ながら感心したものでした。その後、今の大きさに引き伸ばすのに、10円も取られ、なんと高価なものよと二度びっくりなり。でも今日となつてはこの写真のお陰で、宝形づくりの大日堂と比較して、楓樹のいかに大木であったかを知ることができる。その頃は今と違い、電車もバスもなく、どこへ行くにも歩くばかり。従って遠くへは行けず、ゆえに秋の紅葉といえば禅昌寺か大日寺に限られていたために、昔の明治天皇の天長節、すなわち11月3日ではまだ紅葉には早いけれど、紅葉見ごろと書いたポスターに特に赤くなった楓の枝を取り付けて、長田さんの前の川越小太郎、すなわち長田町の名物塩昆布を売る家の格子戸に吊らせていただいた。当時は今のようには、日曜たびに休む人はなく、



天長節とか大ドンタクといえは時候は良し、その日の来るのを待ち焦がれ、楽しんだもので、大日寺では楓の木の下に床几を置いて、莫塵を敷き、たばこ盆を置いておくと、今で言う観楓客がちらほらとやって来る。腰を掛けたらしめたもので、早速と万古焼の急須にお茶を入れて持って行くのは私の役目で、嫌なこともあったが、お茶代欲しさによく務めたものです。お茶代は2銭か3銭が普通で、時には5銭の白銅、10銭の銀貨がお盆の上に置いてあると、ホクホク顔でとても嬉しかったものでした。中には蓆を敷いて、いわゆる「林間紅葉を焚いて酒を温む」の連中が来ると、お茶代として50銭の銀貨を頂くようなときは飛び上がるように嬉しかったが、お茶代は皆お寺に納め、暮らしの足しにするために、私にはいただけないとは言え、ちよくちよく懐に入れる弁天小僧がいて、お婆々に叱られたものでした。その自分の50銭は男なら1日半、女なら4、5日分の労働賃で、随分値打ちのあったものです。ゆえにこの時分になると心配の種は9月3日の210日前後の台風でした。一度大風が海の方から吹き上げると、楓の葉は一晚のうちに縮れて見る影もない哀れな事になり、その年は紅葉も見られず、したがってお茶代もなし。お手元は不如意で心寂しく思ったものである。大日寺の楓は普通に、あちらこちらにある楓と違い、真紅に燃える一行寺もみじなれば種が高値に売れたもので、長田に広田辰造という大きな植木屋が、一升を1円50銭で買ってくれるので嬉しくて、風でも吹いた夜は早朝から一生懸命に拾い集め、一升になるのを待ちかねて持って行き、1円50銭を手に握った時の嬉しさは格別で、

たとえ1合でもその割で買ってくれるが、悲しいことには3分の一は下のよその地面に落ちているために、村の子供が俺も俺もと拾いに来る。しまいには上の境内にまで入ってくるので、拾わせまいと競り合った餓鬼仲間も今ではもういない。

この植辰の若い者に芳しゅんすなわち若井芳造という人がいて、大日寺へもよく仕事に来てくれた。昭和二年5月初めに64歳で亡くなる。ある時、現在の明泉寺の知章公の墓前両脇にある石灯籠が石段の下にあった頃、手入れ中に灯籠の心柱を抱いたなり溝へ仰向けに倒れたので、さあ大変、村の人を頼んで助けてもらうなど大騒動したことがあった。その時分は一日働いて晩に渡すお金が55銭ぐらいであったと思うのに、昭和36年現在では1300円以上なるには、ただただ驚くばかりで、全く昔話にもならん。

その芳さんは息子や娘も幸せで、長田では40年の現在もなお一番の長命で、私も一度逢うて昔懐かしい物語がしたいと思ううち、昭和41年5月初めに90何歳かで亡くなった。思えば、古しし0余年も昔のことである。本堂の前の線香立ての石の軸石には若井留吉の名が刻まれている。

ともかく、この2本の楓樹のおかげで、お寺も私の懐具合も良かったのであるが、あの年の春、新萌えが美しく出始めた頃に遅霜が襲い、柔らかい新萌えは真っ黒になったことがあった。以来、次第に衰え、ついに枯れてしまった。今日存命ならば、天然

記念樹として保護もされ、大したものなるにと残念に思うが、是非もないことである。その後、私はかなり広く各地を旅行して、ずいぶん大きな楓も見たが、一行寺楓としては今もなお見当たらない。近くの鈴蘭台、旧の小部村のお寺に鶏冠木と名乗り、天然記念物に指定されているので、ある日わざわざ見に行きたるも、私の目にはあほらしく満足できませんでした。

大日寺にも跡継ぎをと苦心して、もみじの木からは楓糖ができるくらいなれば、蟻や色々の虫がついて育ちません。楓糖はメイプルシュガーというシロップで、パイプ用のタバコの葉には噴霧器で吹き付け、しっとりしたタバコを作るのに必要欠くことのできない重宝なものである。タバコの味を数倍良くするので冬籠りの生活を送る十和田湖地方の人たちには、楓の幹に穴を開け樹液を取り、これを煮詰め、濃縮する仕事は大切な副業である。

楓樹亡き後の石垣。古明泉寺より現在の地に移ってきた当時のものとしては、紅葉の大樹が枯れた現在では細々と生き、不生不滅の木と不思議に思われていた真柏も小書院を建てるに付き、是非なく伐り、今では株だけ保存している外は、石垣の一部に昔の面影を見ることができるようである。その石垣は正面石段に向かって左側の石垣がそれで、創建当時の石垣である。中ほどに膨らんだところがあり、これは楓の樹の根が押し出したもので、毎年台風の時期になると、楓樹はものすごい大風に吹きまくられるのを見てみると、樹も倒れ、石垣もはじけ出して、崩れはせぬかと恐ろし

くなり、心配でなりませんでしたが、今では樹も枯れ、心配も悩みもなくなったが、石垣の方は膨れたままで、今なお無事なるが、その理由を私以外に知る者は無い故に、拙い筆ながらも後日の為に書き記す次第である。昭和37年9月の長雨で、ついに現在のようへたばり、一時は今にも崩れるかと思ったが、またじんわりと落ち着いたので、昭和39年3月16日に危ないと思いつながら、現在のようへに応急手当てをする。(玄峰が入寺して最初に行った事業は、この横腹が膨れて、いつはじけ出すかわからない石垣の修理工事で、寄付を檀信徒にお願いした最初であった。総代は西上昇氏であった。寺の北側におられた橋本さんというベテランの石工が息子たちを動員して突貫工事でやってくれた。)

明泉禅寺は建て直る。天寿なるか銘木の楓樹が二本とも枯れた後の大日寺の境内は寂しく、観光に杖を曳く人も少なく、有名であったお寺も無実となり、建物は次第に荒れ、雨は漏り、霧は流れ、夢路もやすやすと辿れなくなりし頃に、西尻池は高福寺、東尻池は極楽寺など、いずれも立派な普請ができ、長田の各寺にもお金が下がることに、尋ねてみると蓮の池を処分した公金は、学校および公会堂またはお寺以外に使用はできず、個人への分配は絶対にできないとのこと。蓮の池とは何の因縁もない寺々がお金をいただくのに、池とはつながりの深い明泉寺へ分配の無きは不合理なりと思いが、なにぶん権威ある村の役員は皆、その寺々の総代および世話方なるに比し、無縁無檀の明泉寺にはそれが無く、故に公席で大日寺へも強く援助の言葉を添

えてくれる人のなかりしたために悲しくなった。

行基菩薩が池を作り、耕地を開墾して人心の生活安定に力を尽くされた功績に報ゆると、思召して、誠に恐縮の至りにそうらえども、応分のご寄付を成しくくださるようにと理由を述べ、願書も出してお願いしたが、尻池の方は藻川氏の曰く、「公金の処分なり分配は皆片付いた。今となつてはなんともいたしかたありません。」とのことであったが、流石に長田の方は1000円也を分配するからとの通知を受け、有難いやら悲しいやらで、胸は平らかでなく、故に長田協議会会長谷口庄一氏に強いて貧寺の明泉寺のために格別のお同情に預かりたいと、再三お願い申した功空しからず、福聚寺の足立恵補師のお言葉添えもあって、1000円也が3000円也に改めていただけることになった。協議所に呼ばれて金3000円也を確かに我が手にいただいて、固く握ったときは感激に身が震えた。なれども他のお寺に分配された額に比較すれば、蚊の涙ほどなるに、理屈も述べたく思うが、下手なこと言うて虻蜂取らずになつては大変と有難くいただいて、早々に帰り、山内一同大喜び、生まれて初めていただいた大金なれば、その夜は気になり、心配で寝られなかったことを今も忘れない。この金を基金として先師以来、多年の宿願を成し遂げんと、いよいよお寺の改築の念に燃え、悩み苦しむ私に同情して、世間からは「積もるほど細くなるや夜の雪」と言われていた勤儉家で名高かった中島しか老女が思いがけなくも皇貨500円なりを即金で御寄進下されたには嬉し涙がとめどなく流れた。これに準じて西伊三郎氏も金500円なりを志納下さ

れたのが最高で、下は一銭に至る、およそ一万五、六〇〇人からの零細なお宝も集ま  
て、一万数一〇〇〇円となった。私は酒やたばこは無論のこと。剃髪も自分で。風呂はあ  
ちらこちらで入れていただき、電車にさえ乗らず、その頃は一区が二銭であったが、  
往復で半銭助かると思い、徒歩を続け、不要なものは売り払うて、すべてを建築費の  
一筋に流し。なお、篤志家にすぎり、普く浄財の喜捨を請う。

「水のしたたりかすかなりと雖も、ようやく大器に満つ」の格言を信じ、「君子は財  
を惜しむ。これを用いるに道有り」と実行せし功空しからず。次第に資金の増してゆ  
く嬉しさ。ただ、金！金！と猛進の一路を辿る。相談する人もなく、頼るべき人もな  
し、世話方はただ名ばかりで、相談すれど重荷がかかると思い、招けども近づいては  
くれず、でも幸いなるかな絹屋こと橋本寅之介という大棟梁の同情を得て、万事好都  
合に話は進み、すべては棟梁と私とで進行して、無駄なお金は、たとえ一銭たりとも  
消費せぬようにして、積み立てに専念した。私がこのように苦心して、零細な金を集  
めているとも知らず、わずかな縁故や手蔓を求め、我にさせろ。私に請け負わせてく  
れと、入れ替わり、立ち替わり、真実に寺を立てる程の腕も力もない大工までが頼み  
にくるのには困りましたが。最後はやはり橋本を信じ、頼むことにして、他にはそれ  
ぞれ多少の鼻葉で断り、山内では一同、夜となく昼となくお金集めに努力を続ける  
も、なかなか思うように集まらない。棟梁のいわく普請に着手すれば寄付も頼みやす  
いからと励ましてくれたので、少々無理を心配しながら表面は一、二、八〇〇円と契約して、

昭和6年6月1日に起工式を上げ、いよいよこれから募財に馬力をかけようとする6月16日の朝、突然、満州事変の火ふたが切られたという号外が飛び込んできた。一

瞬、何とも言えぬくらい不安な感じがした。それもそのはず、我が日本国が昭和20年8月15日敗戦、無条件降伏のやむなきに至りしは、この時に始まるゆえに、お寺の寄付どころでない。その頃、町の役を務めていた私は何かと多忙になり、飛行機献金は各家に十銭以上で、頼みに回るなど、故に大日寺の寄付はとてまたのまれず、一時中止とまでなりかけたが、さすがに当時正法寺、その後平野の祥福寺に出られた臥牛軒

ナガマワリ

長廻正元老師がご推薦下された大棟梁だけに、理解も深く、さつそく大工を減らし、弟で名工として名高い文太郎他々人でコツコツと続けてくれました。私は肩身の狭い思いをしながら、あちらこちらと来る日も来る日も気を使いながら、心に油断なくお願いに周り、不断の努力のおかげで、どうやら目鼻がついてきた。工事の方も次第に進み、これぞ仏天の加護なるか、不思議にも意外に万事好都合に運び、棟上げより骨組が立派に出来上がった姿を見た時の嬉しさは格別で、これで死んでもよしとさえ思い感激しましたが、百里の道は九十里を持って半ばとするとの古人の教訓を守り、いよいよ蟻のように働き続けた。この間に、難しい議論や犠牲らしい事故も起こらず、強いて言えば手伝いが昼食後、いざ仕事にかからんと足場の丸太に跳びついた瞬間、細かった丸太が折れたために仰向けに倒れ、背中を強く打ったので一時はびっくりしたが、それほどの怪我でもなく。彼我共に大助かり、また佐藤さんという手伝いが瓦

を肩に本堂の西側の屋根、すなわちお墓の上を北に向かって行く時に足を滑らし、倒れた時こそ落ちたかと思った。何しろ下は石ばかりのお墓だからびっくりしたが、流石に手伝いのベテランだけあって無事なりしが、下で見ていた私はさあ大変とあんなに心配したことはなかった。それ以外に大して危ないこともなく、この大工事を無事に完成することを得たのは、真実に神仏の加護なりと法悦を感じた。なお、内外共にもったいないほど、すべてのものが揃い、いよいよ昭和8年5月12日より14日に至る3日間に亘る入仏落慶供養大法要を営むこととなり、はじめの12日は私がお世話になりし、現南禅寺派管長河野霧海老大師を始め、本山役員諸大徳のご光来を忝けのうす。兵庫派内は申すに及ばず、禅昌寺派各寺尊宿の御随喜を願い、福聚寺足立惠補師のご好意で休息させていただき、長田公会堂（現東宝映画館の前身）で勢揃いして、私は道中車上で香を焚きながら先頭露払い。老大師に続いて各尊宿は人力車で、稚児男女14人等々の大行列で静かに練り来る。宮川九丁目よりは、道路の両側には大日寺入仏慶讃大法要の提灯が飾られ、金紙銀紙の花びらは薫風に吹かれ、翻る美しさ。時は5月の12日、面を払えども寒からず、楊柳の風。好天氣に恵まれて、坂の頭に来れば、緑樹で作る大歓迎門に迎えられ、やがて山門にのぼり、新築の本堂新しき荘厳道具に飾られた内陣に無事着席した時の嬉しさは、魚水に帰る思い、ただ感激で目頭が熱くなるのを感じた。法要は形の如くに始まり、来賓の祝辞等も受けて、万事滞りなく終了す。全ての物皆新しき中に私のものは法衣を始め、何一つ新調はできず、現



南禅総長の直山元珠師（南禅寺塔頭牧護庵住職）の厚意で拝借し、下駄まで中古品で済ませしが、私の心は誠に朗らかであった。

慶讃法要 2 日目、13 日も好天気を開ける。今日の大導師は後日、石川県の国泰寺派管長になられた勝平大喜老師を迎えて、法要並びに老師得意の名調子で、午前と午後 2 回にわたる大講演は「野火焼けども尽きず春風吹いて又生ず」たとえ無縁無壇のお寺でも、和尚の努力と皆々様の信施によらば、このような立派なお堂も建つという意味の大獅子吼に参詣者一同随喜の涙に咽び、私はなすべきことをなしたに過ぎないのと恥ずかしく、でも悪い気持ちはしませんでした。夜は南禅寺教学部長三木五葉師のお話に聴講者堂に満ち、盛会であった。

入仏大施餓鬼。3 日目は前妙心寺派管長五葉愚溪老師を祥福寺より御光来を忝うして、ご寄付を頂いた施主家に対し、報恩感謝で山門施餓鬼を執行す。総供養に引き続き、宗佐田寿寛師は同行 54 人で参詣され、下の広場で大護摩の供養など、3 日間とも暖かで静かで、申し分なき入仏日和で寺崎方堂氏が句に「青嵐千切れ雲さえ無かりけり」と靈感あつて詠まれたかのように、後日になって特に感を深くした。

とにかく三日間は大賑わいで、甘酒の接待には現海泉寺和尚が南禅僧堂より雲水で加勢に来て、赤鉢巻姿で威勢が良かった。3 日間に四斗樽 3 丁では足らず、最後にはお粥を炊いて、白砂糖を入れて出すなど、雲水のお陰で大変な騒ぎや賑わいの中に、無

事平穩に終幕となる。

翌二日は大雨となる。翌日は曇天となり提灯、その他取り入れがあらあら片付いた頃より降り出した雨は次第に大降りとなり、一同は連日の疲れを癒す雨休みとなる。

先に述べた句の如く三日間だけあつらえたような好天気であったことを、今も不思議に思っている。

句碑は大日寺の境内にあつて、明泉寺の本堂並びに庫裡の建築材は全部寺崎氏が入れてくださったものである。氏の幼い頃の寺崎一家は運が悪く、絹屋の爺さんはずいぶん世話になった大恩人なればと、現棟梁を通じて恩を明泉寺へ帰されたようなことになり、求めざる幸を与えられたようなものである。方堂氏はその後、珍木屋をやめて現在では、大津すなわち粟津の義仲寺に納まり、もっぱら句三昧で余生を楽しんでおられた。木魚の代わりに瓢箪を叩いて、芭蕉が残された名句に節をつけて、連続でお経のように唱えておられるのを朝のラジオで拝聴したことがある。

その後、明泉寺は別にな変わったこともなく過ぎし来るも、お国の方は満州事変が上海事変となり、大東亜戦争をあまりにも長く続けたために、国は痩せ人も疲れ果てて、大変なことになり、昭和20年の春には寿永の昔、平の盛俊の陣所になったごとく、不思議にも再び皇軍の陣所となり、兵隊が10余人も入られていて、安久澤邸におられた隊との連絡や交渉で、出入りが激しく、私ら一家は居るところもなく、片隅に小さ

くなって毎日を過ごしていた。再び再びの警報や空襲となれば電燈は消えるし、それはそれは大変で、戦々恐々として今日こそ、今晚こそ、焼けるものと思ながらも、助かるものなら助かりたいとご本尊大日如来に念じていた。その後、仏像は万が一の時はいつでも避難できるように、戸口まで出しておきました。艦砲射撃のあった夜などはものすごい音とともに、この大きな建物が震え、揺すり上げ、揺すり降ろされるようで、嗚呼、今か今かと思ひ、3月17日の夜、名倉小学校をはじめ、各家の焼け落ちる音や光景は一生忘れられない。ほんとうに火の海地獄で炎の勢いは夜なるがゆえに、一入り恐ろしく、はらわたにしみ入るようであった。食事は米も麦も不足で、大豆が主食のために皆お腹を通し、汲み取り人は来ず、故に便所の始末まで私が指図して兵隊と共に片付けるなど。今思うても戦争はいやだいやだ。でも町内の人は明けても暮れても野良犬のように食べ物を漁り回る時なるに、私ら〇人はたとえ大豆にもせよ、兵隊から公でなく同情的にいただき、〇人が顔を突き合わせていただいたことも、今となっても涙で胸が迫る。

それでも一般は頑張れ、頑張れの一点張りでしたが、隊長の若松中尉には早や解つていたらしく、今思うと8月の10日頃であったかと思うが、今日はぜんざいの馳走があるとのこと皆大喜びで、未だ未だかとお釜の縁に蟻か油虫のように集まり、炊事軍曹からまだ早い、と怒鳴られても、千松ならぬ古備兵の親爺まで、甘いぜんざいと聞いて喉を鳴らしていた。私らもお情けに預からんと胸ドキドキで配給を待って、やっ

といただいたのがお椀に軽く一杯。腹の虫はなかなか承知せずグーグー鳴っているが、もう無いとのこと、兵隊までお椀を舐めて居たことなど、いま思うと夢のようである。

次いでまた翌日であったか、本堂前の庭でビール樽を抜いての大宴会で、久しぶりのアルコールで皆々明るい朗らかな顔で、しばらく何事も忘れたかのようにであったが、後で思うと吉野の蔵王権現堂の前で離別の宴を開かれた大塔の宮様のように、若松隊長が最後のお別れの酒宴であったことを知った。

やがて驚くべき情報を耳にしたのが昭和20年8月15日正午であった。無条件降伏と天皇陛下のお言葉を聞いた瞬間、青天の霹靂。泣く人、喚く人、怒る人。人さまざまの思いはたとえようもなく、今にも黒雲は天を覆い、恐ろしき魔の手が頭上に襲いかかるのではないかと思う、重苦しい不安の中に、思いは変わる急転直下、蜘蛛の子を散らすが如くに散会。哀れ敗戦の悲しさ、しばらくは阿呆のようであった。長らく居られた大勢の兵隊は、寂しく丸腰で引き揚げ、後のお寺の内外はずいぶんと荒れて、後片付けが大変であったが、神戸全市は申すに及ばず、長田付近一帯も焼け野が原と化したことを思えば、「とても助からん、今日か明日か、今ぞ見納めになるか?」と思ひし大日寺は奇跡的に助かった。お寺だけでなく、再々の空襲にも明泉寺町に限り、瓦一枚も破れず、無事に逃れたことは何とんでも不思議であった。今ではそのような事を言う人も、思う人も亡くなったが、その当時は誰でも大日様のおかげで助

かった。ありがたいもつたいたいと言われるのを耳にして、私も共に無事を喜びたるも、喉元過ぎればなんとやらで、今では知る人も語る者だにない。

3月17日早朝よりの大空襲で、犠牲になられた遺体をトタンの波板に乗せて本堂へ運ばれた。15、6体の憐れなお姿。よく18日は彼岸の入りなれば心ばかりの回向せしも、弔う人はほんの2、3人という寂しさ、悲しさ。3月17日との月5日の大空襲で、神戸全市は焼け野が原と化す。従って、明泉寺の組合寺院たる兵庫の福厳寺、福海寺、楠寺、範国寺、真浄寺、恵林寺、円通庵、宝満寺、瑞龍寺は全焼、開田庵は半焼。地藏院も被害あり。以上11ヶ寺の中で9ヶ寺は跡形も無きまでに焼けてしまつて、憐れとも気の毒とも申しようがない中に、明泉寺だけが無事に助かったことは本当に不思議とも奇跡ともお蔭とも思いしが、焼けた方々の前ではめつたなことは言われませんでした。私の心のひがみなるか、皆様より羨ましがられているような気がして、肩身の狭い思いがしたが、今となつては皆様には相済まぬことながら、本当に焼けないで良かった、助かったと、由緒ある明泉寺の将来のために思われてならん。あの時に焼けていたら徳なく力尽きた私には、とても復興は出来ていないと思う。幸いに焼け残った故に行基菩薩の遺志を受け継ぎ、国土安穩にして五穀を豊穰ならしめ、人々の和らぎを願う信仰の道場として、永久に栄んことを念じてやまない。

さて大日如来と申す方は、つまびらかには南無中央大日如来とて諸仏諸菩薩の最高位におられる仏である。国の政り事でも同じこと、県庁で決定したことで、東京のい

わゆる中央で、また警察でも地方で大丈夫と思うたことでも、警視庁で通らぬこともあるように、すべては中央で決定されて初めて効力を発する如く、三世には三千の諸仏ありといえども、中央と唱える仏は大日如来に限られておるようである。故に、天平の時代は国を治める根本仏として造り祀られたのが奈良の大仏、すなわち盧舎那仏である。すなわち奈良を中心にして全国に国分寺を建立して、本尊はいずれも大日如来を安置され、我長田の大日寺もその中の一つになるが故に、古来から有名である。天照らす泉の寺、即ち火は偉大なる熱を発し、尊いものなるが、火のみでは万物を焼き尽くしてしまうが、熱の力により水を蒸発せしめて空気を造り、天地宇宙の間に潤いを与えて、万物を発育せしめるこの不可思議なる働きをなす靈氣。魂とも称すべきものを名づけて、仏教では大日如来と申すようである。故に国々に大日如来を祀って五穀の豊穰を祈願し、人心を安らかならしめたもうたものである。

奈良の大仏は今から約1250年前、天平4年4月9日に開眼供養が営まれたとのことである。その頃は天照皇大神宮様は大仏、すなわち大日如来を母体としてお生まれになったものと言われ、信じられていたようである。弘法大師は、大如来の教えによって、あのように尊いお方になられたことを指して、大日如来を母体としてお生まれになったと言うが如く、すなわち、肉体的の母体でなく、精神及び感化的母体のことで、例えば現在何のなにがしと言われるような人を語る場合には、あの人は慶応の出身であるとか、早稲田の出身であるなどと、それぞれの学校を母校として出身にな

り、世のため、人のために模範的人物となられる如き意味合いの母体説であろうと思う。

それにしても、天照様は神代の方なるに對し、仏教すなわち大日如来の教えが我が国に入つて来たのは86代欽明天皇の時で6代聖武天皇の時代に至り、国教とまでなりしが、天照様と大日様とは時代に大きな食い違いあり、合理的でないと言う人、思う人は無論あろうが、行基様の言われる神仏混合説はまだ神とも仏ともいわれない太古に遡り、例えば天孫瓊杵尊、此花咲夜姫との和合により皇室が生まれたごとく、瓊杵尊を神とすれば、此花咲夜姫を仏、すなわち力と慈悲の和合の血漿が我々お互いの身体であるという道理から神仏混合の説を唱えられたものではあるまいか。すなわち差別の上では世界30億に近い人数は皆別々なるが、平等の上では男女等の差別無く、人間という陰と陽との結合の、すなわち。闇の一に歸することになる。すなわち陽が男で、陰が女とすれば大日如来を母体としてお生まれになったという天照様は先に述べたごとく、肉体的でなく、精神的に宇宙の真理を仮に名付けて大日如来と言うそのものより感得され、次第に人格を向上されたことを指して、大日如来を母体とされたとか、大日如来よりお生まれになったとか申すのではあるまいか。例えば大学に学ぶ学生が、努力勉強により、まれに科目以上のものを習得し得る場合があるように、天照様は大日如来によって神化されたお方なるがゆえに神仏混合である。

すなわち、まだ神とも仏とも名のつかぬ真理の顕われ、すなわち化合物であるという

意味合いを指して、行基様が申されたお説ならんと思う。この場合の真理とは、例えば火は人間は申すに及ばず、何者が触っても熱く、水は冷やかなることに変わりなきがごときを指して心理というのではあるまいか。地水火風は平等にして高下なく、皆受けていながら、真実にありがたい。

私の生き生かされているのは、四大種のおかげであると気づいている人は、今の世の人は皆、利口だからしばらく置くとして、天照様は四大の真理なるものを習得されたものなるが、その真理なるものを名づけて行基様は大日如来と申され、故に神と仏は一万円紙幣の表と裏のようなもので、切り離すことが出来ない境地を指して神仏混淆とか一体という説を立てられたものならん。いずれにしても火は尊い水はありがたいものと信じ、阿蘇や三原の噴火を見ての御神火と崇め、尊び、水は水神様とて有難いものもつたいないものと、盲目的に信じていた頃の方が世は太平で安らかではなかったでしょうか？

科学は日々夜々に進み、すべてが解剖的となり、明るみにさらさねば、承知のならんほどの今日この頃なるに、文化文明の大都市ほど迷うものが多く、易者や新興宗教が盛んであるように、解るほど解らなくなり、自然界および動植物等に対する有難いとか、勿体ないというような精神及び道徳的なことは一笑に付され、温かみも潤いもなく、口に平和を唱えながら、進歩する物は皆人殺しの道具ばかり、というのが現在の世の有様のように思う。故に天照様や大日如来の話はほとんど流行らないが、昔は固く



信じて疑わず、その証拠に上は天皇様をはじめ高位の方、及び武将に至るまで、仏の教えを信じ、入道されたことは皆人の知るところなるが、入道とは仏が示された道に従うことで、何も頭を剃って坊さんになるばかりでなく、平常心是道、すなわち天は高く地は低し、人はその間に生まれ、和合のもとに働く、という仏の教えを守り、常に安らかな心を持ち続けるように心掛けることを建前とする。

人は道、すなわち規則を守らなかつたら、わが身のためにもならず、他人にも迷惑をかける。車も規則を守らなかつたら道から転がり落ちて事故を起こすごとく、道、すなわち掟を守るということは、自由の反対で、窮屈であろうが、世のためわが身のために安らかに平和な日暮らしを続けようがためには、いやでも守らねばならぬものを、道というように、私は思う。神道というも、仏道というも、皆平等にして平和な道の歩み方を教うるもので。平等とは、例えば品物を買に行き、秤が真一文字、すなわち水平であれば彼我ともに申し分なく、これが平和と言うものならずや。この時、重りの方がピンとずり落ちるくらい高く上がり、品物の方がずっと下がった場合は、買い手のお客は喜ぶけれど、売り手は損をする。でも損して客取れで、薄利多売も結構なれど、結果としてその店は繁盛するが、他の店からは恨まれる。反対に重りが下がって品物の方が上がるような売り方をすれば、客は寄りつかなくなり、その店は寂びれる道理でこれは、道すなわち規則を守らぬからである。損する、儲かる、引き合う、引き合わぬと、お互いに赤眼をつりあうのも、秤の棒が水平でないから起こ

る波風ならんと思う。塩やタバコは専売になれば平等にして、高下なく薄利であつても、立派に商売として成り立っていくように、それには笑顔で親切で相手に悪い感情を与えないように、常に心がけていけば、いわゆる声なくして人を呼ぶ。売る人、買う人、共に喜び喜ばれて平和の一端が見いだされる。千里の道も牛の一步よりで、一気に大乘的平和を呼び迎えようとしても無理である。ゆえに神仏の示された道に間違いはないと信じ、善を行ない、悪を成さず、要は実行にあり。道は近きにあることを知らねばならんと思う。以上の如き意味合いにおいて、大日如来は水の如く、無味無臭なるも万能に働き、すべてに支配力を持たれる仏なりと言い得ると思う。故に、中央大日如来、すなわち誠の道を教えたもう仏。闇を破り、普く明らかに世間を照らしたまう、真実の仏という意味になると思う。太陽と言えども、光は昼だけで、夜は暗いが、大日如来の光は親を親とも思わぬ極悪非道な息子でも、親は常に心配している如く、魚は水の恩を思わずとも、水の方は魚から離れることあたわざるごとく、大日如来の光は昼夜別なく光る。船ならばローリング、ピッチングもしない大海原を静かに楽しく航海を続けるようなものならん。ただし、自然界には不可抗力ということがあるが、人間界は心の持ち方次第で、いかなる難関でも避けて無事平穏ならしめることもできると思う。故に中央という名称の建前上、平等にして高下なき諸仏の王、全宇宙に満ち、みなぎる大きな仏、即ち魚に対する水の如く、人にとって空気の如き貴きものを名づけて大日如来と言えることができると思う。

ところで、人間は妙なもので、口では平和平和と言いながら、少し平穩に慣れると平凡なというて変化を求め、危ないスリルを喜ぶ悪い癖がある。それが高じてくると喧嘩となり、鬪争、戦争と平地に波を起こすことになる。ゆえに万徳円満な大日様のよくな仏では、収まりがつかぬようなことが起こった時の収め役のような格で脇立ちとして、不動明王や毘沙門天のような質実剛健な用心棒が付いて居られる。世の中に何が恐ろしいというても、無茶者ほど怖いものはない故に、神や仏は国を治め、人心安かれと春夏秋冬、不思議なほど廻り巡って、常に大観されているも、人間はとかく我身勝手なことを思い、求めて、大自然の有難さを思わないのは、水中の魚の如しで、水のおかげでこのように自由自在に思うがままに働き、生きていられると、水の恩を知る魚の無きがごとく、人もまた神仏、すなわち空気をはじめ、大自然界の恩を知らず。いや学問的に知り得た人ほど、理屈をいうて、恩を知らず、報恩謝徳の念が薄いように思う。人に仏性あり修せずんば出でず。修行していわゆるお悟りを開いた人、すなわち物質界でなく精神界を会得した人の目から見れば、物質界はみな夢の世なり、と承知されるが、世間多くの人は、夢を見て夢なることを知らず、覚めてのち初めて夢なることを知るに比べて、大日如来を始め、もろもろの仏の目は三世にわたる、光り輝いている、というものの道理を行基様により、世界は広く我が国以外にいろいろな国あり。天照様以前に神あることを知らされ、その神とは何ぞや、となれば、大日如来の教えの眼目は大自然界と、自分の心を知るにある。故に大日如来を母

体として生まれ、人格を高められた天照様なれば、神すなわち仏、仏すなわち神にして一なり。神仏混淆といい得る理由、及び関係が会得できると思う。例えば、マッチの如きもハクと軸が擦れ合う瞬間に火というものが生ずるごとく、男だけでも女だけでも和合の結晶を見ることはできず。ゆえに男が尊くて、女が賤しきにあらず、男女の和合によって人類の今日あることを知らねばならぬ。いや、知らしめて下されたのが行基様の神仏混淆の説で、明治の時代まで何人も疑うことなく、無事平穩に信じ来たりしに、いわゆる過ぎたるはなんとやらで、人間の知恵が進むに従い、信仰すなわち精神という重りが軽く上がり、解剖的理屈の方が重く下がって、行基様の説は用いられず、信じられなくなったことは、つい先ごろまで皇大神の王道をしろしめし給う<sup>すめら</sup>現人神<sup>あら</sup>と信じて疑うことなかりし天皇様を終戦後は神に非ず普通の人間であると言われるようになられた様なものではあるまいか。

先にも述べたように、我が国を太古は扶桑の国と称していたようで、日本国と称するようになったのはいつの頃か知らないが、思うに太古は我が国以外は国あることを知らず、陽の光を受けて暖かいとか寒いとかを身に感じ、また万物の発育するのも陽の光のおかげであることを知り、生きてゆく上に色々便利なことを教えてくださった偉い人を火と水の和合の化身であると信じ、大日靈貴尊、すなわち天照らす大神という御名を奉ったものと思う。また、阿蘇や富士や三原など盛んに噴き出す火を見て、御神火と崇め尊び、天よりは陽の光、地よりは火の恵みを受けて、すべてのものが生き

生かされる日の火の素の国、日本の国、大いなる日本の国、すなわち大日本國という様になったのやも知れずと思うが、いかがなものならん。

故に太陽は日であり熱である、昼であり、男であると。すれば月と水は夜であり、慈悲であり、女であると言えると思う。故に太陽は天なり。水は地なり。天は男なり。

地は女なり。この和合によって全宇宙を支配するものを名づけて神とも仏とも大日如来とも申すのではあるまいか。例えばお互いの心のようなもので、「我が心、鏡に映るものならば、さぞや姿の醜かるらん」たとえ鏡に映っても、常に恥ずかしくない姿であり、形であり行いであるならば、これぞ誠の道に叶うた本当の人、すなわち生きた神とも仏とも言い得ることができると思う。

このような境地に至りなば、男でもなく、女でもなく真理の現れであろうが、仏と凡夫の違いは、以上のような境地が神や仏には永続するが、凡夫のわれわれは稲妻の如くすぐに消滅するから、駄目である。回りくどくいくら書いてみたところで、神や仏のありがたさを会得することは私自身にもできず、人に伝えることもできない。要は水が有難さ、美味しさを知るには、わが身が飲んでみなければ人からいくら聞いても喉の渇きは止まらない。有難さもわからない。魚ならば、水を離れてみなければ水の有難さがわからないごとく、蟬や蛙にいくら厳寒の苦痛や銀世界の美しさを説明したとて体験なきがゆえにわからないのと同じである。ゆえに神や仏の有難さは理屈や説明では会得はできない。ただ人として人たるの教えの道を信じ、守り、万物に感謝を

身に行うことによつてのみ体得し、心身の安心を求める以外にすべはあるまい。ただし、神仏に限らず、いずれの教えも皆同じで、たとえ神仏混淆の説は破捨されても、道には今も古もなく、人によつて迷いあり悟りあり。故によく考慮して誠の道を歩まねばなるまい。その誠の道は近くにあり、人これを遠きに求めるがゆえに、迷いあり、苦しみあり。ただ、「諸々の悪は作すな、良いことは実行せよ」との教えを本当に身に行うことができたならば、自ら国は富み、人は安らかな日暮らしができると思う。

無学にしてつたなき筆の悲しさ、広大なる神や仏の御理想の片鱗だに述べる力なきわが身を恥じながら、この稿了る。

昭和36年10月25日、富士義孝 73歳。